堺利彦

現代川柳の精神

埼玉川柳社

現代川柳の精神

堺　利彦　著

埼玉川柳社

《著者略歴》

堺　利彦　（さかいとしひこ）

昭和22年北海道生まれ　国学院大学法学部卒

昭和44年東京国税局に勤務　高岡税務署副署長等を経て

現在税務大学校教授

昭和40年8月　川柳雑誌「さいたま」入会　清水美江に師事

昭和41年2月　同人　篠崎堅太郎に私淑

〈現在〉　埼玉川柳社同人　日本川柳ペンクラブ会員

現代川柳の精神

平成５年２月２０日　発行

著　者　堺　　利彦

発行者　内藤　悟郎

発行所　埼玉川柳社

〒330　埼玉県大宮市堀の内町3-209-4

電話　048(642)5405

印　刷　白陽舎印刷工業株式会社

ＩＳＢＮ４－９１５９１２－０２－７

© 1993 by Toshihiko Sakai

乱丁・落丁はお取替え致します　　Printed in Japan

現代川柳の精神▽目次△

序……内藤悟郎……7
第一章　現代川柳私論序説……11
川柳の楽しさ……12
センリュウ・マインド……23
現代川柳私論序説……26
第二章　現代川柳の精神（こころ）……37
ユマニスムの体現……38
経験への深まり……44
清冽な驚き……50
詩語と口語発想……56
イメージの重層性……62

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

象徴への昇華……68
比喩のこころ……74
アイロニイの世界……80
抒情の内奥……86
現実への抗い……92
ユーモアの豊饒……98
哀愁の諸相……104
含羞と懐疑……109

第三章　現代川柳への潮流……115

新興川柳概説……116
戦後川柳の位相……127

第四章　現代川柳の構造……139
川柳のリズムについて……140
まなざしの座標……151
創作への衝動……163
虚構雑感……168
シュールレアリスムと現代川柳……179
エイゼンシュテインのモンタージュ論と現代川柳……189
第五章　現代川柳作家論……201
誠実さの明証――佐藤正敏試論――……202

哀愁の走馬燈
――篠崎堅太郎私論――　208
抒情の内実
――須田尚美小論――　214
郷愁の彼方
――桜田裕子句集「海酸漿」を読む――　220
解説　須田尚美　227
あとがき　235
《初出一覧》　238
《参考文献一覧》　240

序

日本語の味

著者との出会いをいま思い返してみて、昭和四十年の暮れが最初であったとは意外な気がした。私の記憶の中ではそれ以前に出会いがあったと思い込んでいたからである。

当時の著者は、国学院大学一年生。金ピカボタンの詰め襟服で、常に微笑を含んだ受け答え、その新鮮な印象は、十年前に同じ形で出会った篠崎堅太郎と重なり合って、その出会いの時期を錯覚していたのだと思う。

それにしても著者と堅太郎の、川柳遍歴は相似している。十代からの時事川柳投稿をきっかけに美江師に拾い上げられ、一気に川柳の階段を馳け登り、尚かつ有り余る若さを《川柳とは何ぞや》と、自問自答の論説に挑戦して疲れを知らぬ。その真摯な勉強振りに唯ただ感服するばかりであった。

勿論、先輩諸氏の「何を今更小賢しい」とか「繰り返しの論説」とかの批判も聞かぬでは無かったが、私は少なくとも新人発掘、特に若年層へ〈川柳の魅力〉を訴えるのには、大きな働きがあるものと感じ取っていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

川柳の底辺拡大は美江師が掲げた「さいたま」の悲願でもあるが、現況は僅にマスコミの文芸欄や、カルチュア教室での拡がりを見る程度だが、これとて老化現象を免れていない。これは若い人達に、川柳の〈存在価値〉を認めて貰おうとする努力と忍耐が、まだ足らぬためなのかも知れない。前述の如く、柳論は今後も繰り返されてゆくであろうが、既成柳人の〈やり取り〉だけでは新人の発掘は成し得まいと思う。

斯かる時、同人利彦がこの本を出版する朗報に接し、我が意を得た思いで埼玉川柳社発行とした次第である。

書き出しで解る通り、初心者を対象に川柳の魅力を説き明かしてゆき、遂には川柳の神髄に触れる筆運びは、必ず共鳴の瞳を集めることと信じ、より多くの日本語を愛する人に読まれん事を、切に願って筆を擱く。

平成四年十二月

埼玉川柳社代表　内藤悟郎

第一章　現代川柳私論序説

川柳の楽しさ

最初に「川柳の楽しさ」について考えてみたいと思います。川柳については初めてのみなさんもいらっしゃると思いますので、「川柳とは何か」ということをまず御説明しておきたいと思います。それには、みなさんがある程度御存知の、俳句との比較において、その違いを説明するのが早道かと思われますので、例をあげながら御説明することに致しましょう。

◎ひん抜いた大根で道を教えられ　古川柳

○大根引大根で道を教へけり　小林一茶

◎化けそうなのでもよしかと傘をかし　古川柳

○化けそうな傘かす寺のしぐれ哉　与謝蕪村

ここに例としてあげました句の、それぞれ前の句が川柳（江戸期の古川柳）で、後の句が俳句（江戸期の発句）です。

このように、川柳と俳句を並べてみますとおわかりのように、川柳は、私達が日常使っている話し言葉や書き言葉による素直な表現、つまり口語発想によ

る表現です。また、俳句のように「大根引」「しぐれ」といった季題（季語）も必要としませんし、切れ字といったことも特に考えなくてもいいわけです。ただ同じなのは、五・七・五の計十七音字による表現、これを定型と呼んでおりますが、これだけが共通しております。これらのことを整理してみますと、次のようになろうかと思います。

川柳　口語無季定型
俳句　文語有季定型

ここで共通することは、十七音字の定型であるということです。この定型ということについて、私は、いわばリズム的な表現、つまり、日本人が古来から受け継いできた、リズム的な美的感覚による最少単位の詩的表現が、川柳の定型であると思うのです。

以上のように、形式的には、川柳と俳句との違いというものが、少しはお判りいただけたかと思います。

では、川柳や俳句が対象とするものは何かということについて、若干考えてみたいと思います。

俳人の清崎敏郎さんは、「俳句は、季題諷詠詩なのである」といっております。これに対して川柳は、「人間諷詠詩である」とひと言で説明してよろしいかと思います。柳人の椙元紋太さんは、「川柳とは、人間である」といっておられます。つまり川柳の対象とは人間であり、人間を取り巻くすべてのものを対象とするのが川柳なのです。ここで私なりに言葉を換えて申し上げますならば、俳句とは、「季節の移ろいの中で美をみつめる」ものであり、一方川柳とは、「人生の移ろいの中で人間（自分を含め人間と関わり合うすべてのもの）を見つめる」ものであるということができようかと思うのです。

では、いよいよ本論に入って、川柳の楽しさについて考えてみたいと思います。ところでこの川柳の楽しさなり喜びというものは、一般的には川柳のみならず、詩や音楽や絵画等あらゆる芸術と共通する楽しさでもあります。

まず第一点は、創作する楽しさがあります。これは、創造する喜びです。つまり心のいろいろな感慨を言葉によって表現することです。この創作する楽しさというものを、その過程によって分けてみてみますと、一つはものごとを発見する楽しさなり喜びというものがあり、そしてそれを形あるものとして句に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.